





森を伐り開いてつくられた昭和10年代の代表的な炭坑・丸三炭坑宇多良鉱業所（三木健編著『写真集・西表炭坑』より）

年かけて調べたのですが、その間に西表炭坑について五冊の本を出しました。

私は歴史というものをどのよう

なかたちで残せばよいのかと考  
え、一つはできるだけ関係者の話  
を聞いてこれを文字に書き残すこ  
とに決めました。これは『聞  
書・西表炭坑』1982年 三  
一書房という本にまとめました。  
それから関係する資料を一つでも  
多く集めました。これは『西表炭  
坑史料集成』1985年 本邦  
書籍）としてまとめました。また  
写真を一枚でも多く集め、これが  
現在どうなっているか現場検証し  
て、昔と今の二つを組み合わせて  
『写真集・西表炭坑』1986年  
（ひるぎ社）としてまとめました。  
そしてこれらの歴史の通史を『西  
表炭坑概史』1983年 ひる  
ぎ社）や『沖縄・西表炭坑史』  
（1996年 日本経済評論社）  
としてまとめました。

聞き書きをして回ったところ、訪

ねてゆくと「去年亡くなられまし  
た」とか言われ、もう手遅れでは  
ないのかと途方に暮れたこともあ  
りました。いまから思えば調べ  
ておいてよかったですと思います。な

ぜならあのとき私が聞いた人たち  
は、ほとんど亡くなっているか  
らです。かろうじて間に合ったの  
かもれません。

さて、西表炭坑ですが、この炭  
坑の発見や、採掘に至るまでの間  
にもいろいろとドラマがあります  
が、時間がありませんので省略し  
ます。採掘が始まったのは一八八  
六（明治一九）年三井物産会社が  
明治政府の後押しで、沖縄本島の  
囚人を使役して始めたのが最初で  
した。囚人を坑内労働に使うやり  
方は、北海道や九州でもありまし  
たが、それが沖縄でも取り入れら  
れたのです。それはこの炭坑の不  
幸な出発でもありました。坑夫た  
ちはマリアにかかっていたばばと  
たおれ、数年後にはつづれて三  
井は手を引いてしまいました。舞  
台となったのは白浜の向かいの元  
成屋や内離島です。その後も大倉  
組や尚家資本による八重山炭鉱な  
どが手を染めますが、いずれも長  
くは続きません。

大正時代に入ると、琉球炭鉱や

沖縄炭鉱などが坑夫一千人余を使  
って採掘に乗り出してきました。一  
九一七（大正六）年ごろの第一次  
欧州大戦後の石炭需要に支えられ

て、活発に採炭が行われるよう  
になります。石炭は国のエネルギー  
源ですから、戦争とは近い関係に  
あったのです。

しかし坑夫たちの労働は過酷さ  
を増し、納屋制度のもとで地獄の  
苦しみをなめることになりました。  
納屋制度というのは納屋頭のもと  
で坑夫の生活や労働の一切をと  
りしきる制度で、九州あたりの炭  
坑からもたらしたもののよう  
です。四六時中、人練りという労務  
が目を光らせ、逃亡者が出ると捕  
えて見せしめのリンチを加えまし  
た。私は「緑の牢獄」といつてい  
るのですが、出口のない島は、ま  
るで牢獄のように坑夫たちをがん  
じがらめにしました。

また炭坑では、そこでしか通用

しない「斤券」が使われました。  
坑夫たちの賃金は、会社側の発行  
する斤券によって支払われ、坑夫  
たちはこの券をもって炭坑の購買  
所で日用品を手に入れました。本  
来この斤券は、本金と呼ばれた現  
金の裏付けがなければいけないの  
ですが、会社側はそんなことをせ  
ず、紙に斤数を書いたものに、会  
社のハンコを押ししたものを発行し  
ていました。





→大正期に西表炭坑会社が発行した斤券（炭坑切符）三木健編著『写真集・西表炭坑』より）



私はオキネシア（私の造語です）で生まれました。次に太平洋諸国の地図を作るときは、ぜひここにオキネシアを入れてください。「日本の近代の爪あとがこの西表にある」と心に留めていただきたい。その跡は今や森の中に消え去ろうとしています。歴史はそんなものかもしれませんが、しかし現場を保存して後世に残していくよう問題提起したいと思います。

うことはありませんでしたが、村の人たちは炭坑に野菜やマキなどを売ったり、石炭を本船に積み込むときの日雇い労働をしたりしていました。そのとき支払われる賃金もやはり斤券でした。このため村の人たちは不満を持ち、本金で支払えという要求も出たようです。

坑夫たちの苦しい労働と生活を目にしている西表島の人たちは、坑夫たちには同情的だったようです。坑夫の逃亡を手助けしたり、糸満漁夫はザバニに乗せて逃がしたりしたということも聞きました。しかし石垣あたりでは逃亡坑夫に対しては、あまりかわりを持ちたくないという面もあったようでした。

こうしたイメージというもの

は、いつの世も誤った事実認識のなかでつくられていくものです。こうした認識がひとつには、この炭坑の歴史を自分たちとは関係のないものとして放置する一因ともなったと思うのです。私たちはしばしば外に向かっては、沖繩に対する差別を問題としてきたし、いまでも思っています。私たちが私

たちの「内なる差別」に対して目をそむけることなく、しっかりと捉えることが大切だと思うのです。そつでなければ、私たちの差別に対する姿勢はほんものとはいえません。そのことを西表炭坑の歴史から学ばねばなりません。

もうひとつは、地域の産業というものに対する見方です。西表炭坑は石炭資源をとるために資本も労働も外からやってきたのです

がこうした植民地的な在り方が、結局この産業を根づかせなかったのではないかと思えます。つぶれた原因はいろいろありますが、地域開発の本質的なところをみるならば、そういえると思います。

最後に私は、この炭坑跡の保存について提起したいと思えます。かつての炭坑跡は、冒頭で述べたようにいまジャングルに呑み込まれようとしています。消えて無くなるのも歴史でしょうが、いま残っているものだけでも、炭坑の歴史を後世語らせるために残すことは、意義のあることと思えます。私は私なりに本や写真集にして残すことをしてきましたが、現にある遺構をどうすべきか、それをみなさんに提起して私の話を終わります。